

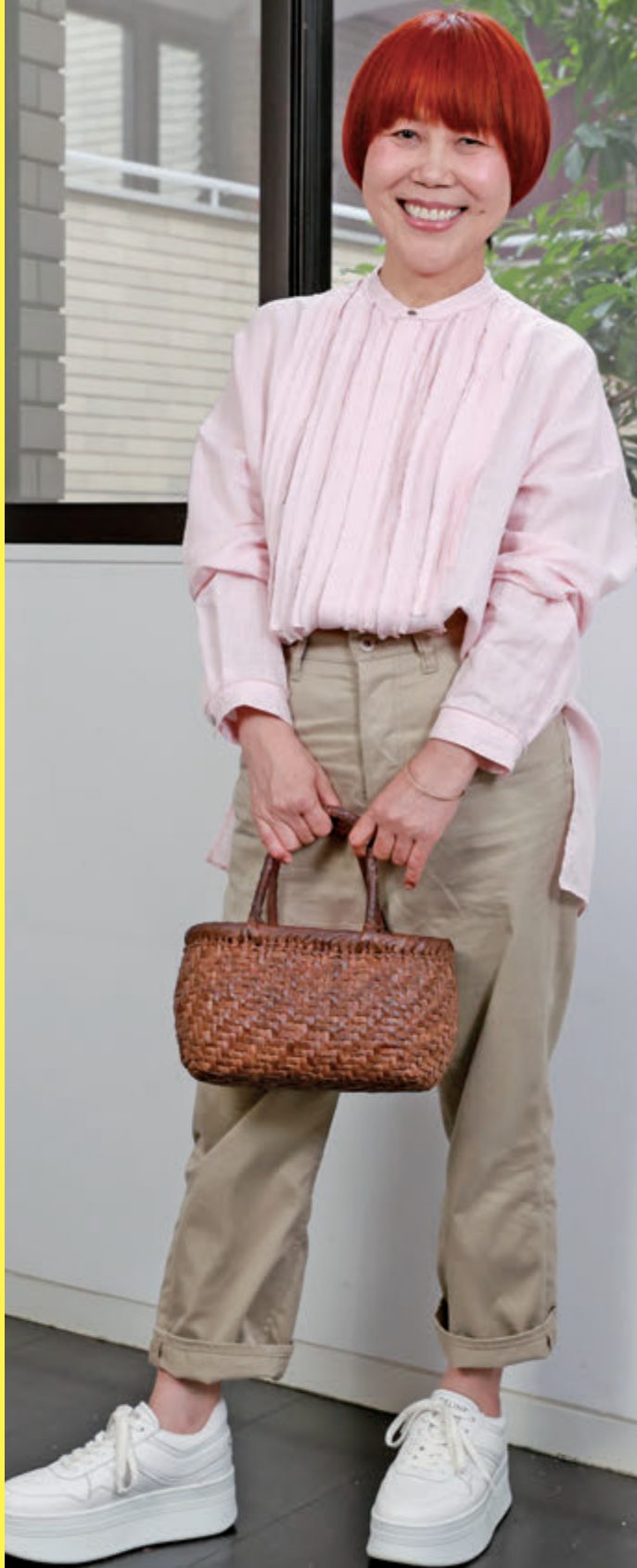
# 山本 浩未さん

ヘア&メイクアップアーティスト

## HIROMI YAMAMOTO

【やまもと・ひろみ】1964年、広島県出身。高校卒業後、資生堂の美容技術専門学校に入学。卒業後は資生堂ビューティークリエイション研究所に入社し、ヘア&メイクアップアーティストとして仕事をスタートさせる。1992年にフリーランスとなり、女性誌をはじめメディアの現場でヘアメイクを担当。その後、週刊誌でのエッセイ連載、トークショーや講演、テレビ出演など活躍の場を広げてきた。現在はインスタグラムのライブ配信「毎日 Beauty Live」も行っている。著書は『60歳ひとりぐらし 毎日楽しい理由』（小学館）、「大人美容 始めること、やめること」（宝島社）等。

自分らしく、  
悔いなく生きる



INTRODUCTION

最新ファッションをまとったモデルたちが、ページを彩る女性誌。華やかな世界を裏で支える職業の一つが、ヘア&メイクアップアーティストである。その一人、山本浩未さんは引く手あまたで、オリジナルのメイク法は書籍化もされるほど。明るい笑顔と気さくな人柄からは想像し難いが、そこに至るまでには大きな挫折を味わい、人知れず抱えてきた悩みもあったという。加齢で衰えがちな外見をより良くするアドバイスも含め、話をうかがった。



Hair and makeup artist  
**HIROMI YAMAMOTO**

——ヘア&メイクアップアーティストとして、第一線で活躍されている山本さんですが、目指されたきっかけは何だったのですか。

子どもの頃から化粧品に興味を持っていて、その中でも資生堂は、母が化粧品を愛用していたりテレビで流れる美しいCMに魅了されたことから、大好きなブランドでした。中学生になると『ベルサイユのばら』の漫画にハマって、「もっと深く知りたい」と関連情報を掻き集めるようになったのですが、インターネットなんてまだなかった時代、しかも地方に住んでいたのも、情報源は限られていました。

ある日、母が購読していた資生堂のPR誌『花椿』をめくると、日仏合作で映画化された『ベルサイユのばら』の女優さんにヘアメイクする一人の日本人男性が掲載されていたんですね。欧米の美しい女優さんを相手にヘアメイクしているその姿を見て、私は衝撃を受けました。「こんな職業があるんだ!」と思って。その男性は資生堂の社員で、日本におけるヘア&メイクアップアーテ

ィストの第一人者でした。

——まだヘア&メイクアップアーティストという職業が知られていない時代ですよ。

そうですね。私も初めて知って、「なんてカッコいい職業なんだろう!」と一瞬で心を奪われました。「この職業に就きたい!この人の下で仕事をしたい!」と居ても立っても居られなくなり、『花椿』の編集部に手紙を出しました。「この人みたいになるには、どうしたらいいですか?」と書いて。

——行動的な中学生だったんですね。

半年ほど経った頃、返事が来まして「資生堂には美容技術専門学校があつて、卒業後はそのヘア&メイクアップアーティストがいる部署に配属される可能性があります」と書かれていました。そこで私の目標が決まったのです。

——両親は応援してくれましたか。

高校が進学校だったので、「両親は当然、大学に行くと思っていたようです。高校1年の三者面談で進路の話が出た時に初めて、私が「美容技術専門学校に行きます」と言ったら母はすごく驚いて、反対しました。私は「応援してくれると思ったのに、そうじゃなかったんだ」と落ち込んで、友だちの家に1週間、プチ家出しました。それで両親も折れて、応援してくれるようになりましたね。

——美容技術専門学校では何年間、学ばれたのですか。

当時は学校で1年間学んだら、もう1年間は美容室でインターンとして働き、美容師の国家試験を受けて資格を取るという流れでした。1学年に200人ほどいた中で、

この職業に就きたい!

この人の下で仕事をしたい!



## 思い通りにいかない現実 打ちのめされました

属されたものの、美容部員用の教材づくりなど地味な仕事が多くて、新商品のプロモーションや、パリコレのバックヤードといった華やかな仕事は回ってこない。イベントで新入社員がモデルを務めることになっても、私が選ばれることはなくて、任されるのは控室の雑用係といった感じでした。

——憧れのヘア&メイクアップアーティストの下で働くことはできたのですか。

その人のアシスタント枠は1人だけで、タイミング的に空気がなく、希望は叶いませんでした。

——でも、ヘアメイクの仕事はされていたのですよね。

そうです。ただ、私は華やかなアーティストメイクよりも、その人らしさを生かすナチュラルメイクのほうが好きでしたし、得意でした。「得意でも、それが社内で評価されることはない。評価されるのは、芸術性が高いアーティストメイクで、それが苦手な私はダメだ」と、一人で勝手に思い込んでいました。

今だったら、それは自分の単なる思い込みだとわかるんですよ。でも、当時は考えが及ばなくて、「自分には技術もセンスもない。見た目もイケてない。何の才能もない」と

全く自信がありませんでした。

——仕事自体はどうでしたか。

モデルさんや女優さんにヘアメイクする仕事は刺激的で、おもしろかったですよ。会社の先輩・同僚も同じ専門学校出身者が多く、皆、仲良しでした。恵まれた環境だったと思います。それでも私はコンプレックスから抜け出せず、常に不安を抱えていました。そんな気持ちからずっと逃げたいと思っていて…。会社は大好きだったのですが、悩みましたが、「辞めないと先がない。一からやり直すしかない」と思い詰めて、28歳の時に退職しました。

——辞めて、どうされたのですか。

一旦、広島の実家に帰って、会社員時代にはできなかったことを片っ端からやりました。運転免許を取ったり、長期の旅行に出かけたりしていましたが、段々やることなくなくなってくるんですよ。地元の友達も最初のうちは遊んでくれるけれど、皆、忙しいから付き合ってくれなくなりますし。

そんな時、以前一緒に仕事をした女優さんの所属事務所から「今度、広告の仕事があるから、浩未さん、ちよつとお願ひできない？」と電話がかかってきました。私はもうヘアメイクの仕事はやらないつもりで

卒業後は、20人程が資生堂ビューティークリエーション研究所に入社しました。私もその一人として、意気揚々と社会人の第一歩を踏み出しました。

——いよいよ夢に向かって本格始動されたわけですね。働き始めていかがでしたか。

自分には足りないものばかりと思い知らされましたし、思い通りにいかない現実を打ちのめされました。

——具体的には？

周りには優秀な人がたくさんいるわけですよ。その上、女性は美人ばかり。私はヘア&メイクアップアーティストになりたいという思いとガッツだけで希望の部署に配

# もう一つ私の武器となったのは、 言葉で表現して伝えられることでした

したが、「最後にもう一度だけやってみるか」  
くらいの気持ちで久しぶりに仕事をしてみ  
たら、めちゃくちゃ楽しかったんですよ。

——以前とは何が違ったのですか。

社外の人たちと仕事をする時、資生堂の  
社員である私はいつも「クライアント」で  
した。そのため、CM撮影でメイク直しが必要  
な時でも、直接私にはなく、広報担当者  
を通じて伝えられる、みたいな感じだったん  
ですね。撮影現場ではチームの中うまく  
入れなくて、疎外感を覚えていました。

ところが、フリーランスの立場で現場に  
行くと特別扱いされなかった。メイク直しも  
「あそこを直してくれる？」と気楽に言っ  
てくれたのです。フラットな関係性で仲間と  
して認めてもらえた気がして、すごく楽しく  
仕事ができました。そこから度々依頼が来る  
ようになり、「やっぱりヘアメイクの仕事  
が続いていこう」と思い直しました。

——その女優さんは、なぜ山本さんに仕事  
を依頼されたのでしょうか。

私が得意としていたナチュラルメイクを  
気に入って、仕事を頼んでくれたそうです。  
それを機に他の女優さんたちからも次々と  
仕事の依頼が舞い込むようになって、その  
中に女性誌の仕事がありました。

その頃の女性誌はファッション記事が  
メインでヘアメイクや美容に関する企画は  
少なかったのですが、徐々に注目されてき  
ていました。特集が生まれ、専門誌が創刊  
されている時代の流れの中で、私の持つて

いたスキルや経験が役に立ったのだと思  
います。

——当時、フリーランスのヘア&メイクアップ  
アーティストはたくさんいたのですか。

まだ少なかったので、フリーランスの私  
は重宝されました。タイミングが良かった  
と思います。もう一つ私の武器となったの  
は、言葉で表現して伝えられることでした。  
ヘア&メイクアップアーティストは感性で物  
を言う傾向があるんですね。例えば「これ  
って、クールでカッコいいでしょ？」と言わ  
れても、一般の人には伝わらないですよ。

私は会社員時代に「何が、どのように良  
いのか、その理由も含めてきちんと言葉で  
説明できなければならぬ」と叩きこまれて  
いて、そのスキルがフリーランスになっ  
てからの仕事で評価されました。

——会社員として身につけたことが、役に  
立ったわけですね。

めちゃくちゃ役に立ちましたね。女性誌  
の仕事に加え、化粧品の新作発表会や広告  
の撮影など目に見えて仕事は増えていきま  
した。30代は自分で「ブルドーザー時代」  
と名付けるほど、来る仕事は全部引き受け、  
寝る間も惜しんで働いていました。

ただ、どれだけ仕事をして、自分か  
ら「ヘア&メイクアップアーティストです」  
と名乗ることはできませんでした。名刺の  
肩書には入れている、口に出しては言え  
なくて。ようやく「ヘア&メイクアップアー  
ティストの山本です」と自分から言えるように

なったのは、30代後半になってからでした。

——何かきっかけがあったとか？

ある人に「アーティストティックメイクが  
できないことでヘア&メイクアップアー  
ティストと名乗れないと思うなら、一度その肩書  
を外してみたらどうですか」とアドバイス  
されたのです。目から鱗でした。そこから  
自分なりにいろいろ考えて、「私もヘア&メイ  
クアップアーティストと名乗っていいんだ」  
と思えるようになりました。

——その後、迷いはなくなりましたか。

仕事をたくさんこなしていると、今度は  
「どうせ私がやっていることなんて、誰でも  
できる」と思うようになって、得意のナチュ  
ラルメイクがつまらなくなっていました。

そんな壁にぶつかっていた時、宝塚歌劇団  
の方と対談する仕事がありました。せっか  
くなので公演を観てみようと思い、その後、  
5つある組を全部観ていたら、どっぴりハマ  
ってしまって(笑)。

——どこに惹かれたのですか。

宝塚歌劇団ではヘアメイクすること、  
女性が男性になれますし、いろんな国の人  
にもなれます。年齢や性格だって変えられ  
ます。そう考えると、ヘアメイクにはすご  
く可能性があるんだと改めて気づかされま  
した。それに私が学生時代、宝塚歌劇団の  
ヘアメイクに持っていた印象とは異なり、  
洗練されていて素晴らしかったんですよ。  
新たな視点で学ばせてもらったことで、  
ヘアメイクのオリジナルメソッドも創れまし



## 新たな視点で学ばせてもらったことで、 仕事のおもしろさも再認識しました

たし、仕事のおもしろさも再認識しました。  
ちょうどその頃美容をテーマに週刊誌で  
エッセイを連載するようになったり、講演  
の依頼が来るようになったり、仕事の幅も  
広がっていききましたね。

——山本さんにとって、ヘア&メイクアップ  
アーティストという仕事のやりがいは？

ヘアメイクすると、ほぼ100%の方が  
喜んでくれます。私はヘアメイクはスイッチ

だと思っています。その時、その場  
面にふさわしいスイッチを入れてあげられる  
ところが良い仕事だなと思っています。

——確かに、ヘアメイク次第で気持ちも随分  
変わりますね。

そうですね。それに世間では見た目で  
判断される場面も多いですよ。私もフリー  
ランスになった時、名刺を作っている人  
に挨拶しましたが、肩書に社名が付かなく

なると受け入れてもらい難いことを実感  
しました。まずは外見がきちんとしていな  
ければ信用してもらえない、自分の見かけが  
名刺になるのだと知りました。

会社員だった頃は「裏方の自分にメイク  
は不要」とメイクをしていませんでしたが、  
きちんとメイクをするようになったら、受  
け入れてくれる人が増えましたね。

——外見をよくするには、何を重視したら  
いいでしょう？

一番のポイントは「その人らしさ」だと  
思います。例えば、メイクをする時、自分  
の顔の嫌な部分を隠すことに気を取られ  
がちだけれど、一番良い部分を強調すること  
を考えたほうが魅力をアップさせる近道に  
なります。そのためにも、まず今の自分を  
認めてあげることが大事です。

——なかなか難しいですね。

最初はピンと来ないかもしれませんが、  
も、自分の良いと思えるところを少しずつ  
増やしていく、自分で自分を褒めてあげる、  
そういうことを積み重ねていけば、できる  
ようになるのではないかと思います。ちょ  
つと手間をかけて、自分に似合う服を探す  
とかね。きれいになるのも、幸せになるのも、  
結局、自分次第なんですよね。誰かがやって  
くれるわけではないですから。

——これまで数多くの人たちをヘアメイク  
されてきたと思いますが、若々しい人には  
どんな共通点があるとお考えですか。

一番は姿勢ですね。どんなにきれいな人



山本さんが年齢を重ねる中で悩みや不安を抱えた時、解決の手がかりを与えてくれた本。左から『80代は今が最高』(川崎 淳与著、主婦の友社)、『青春とは、心の若さである。』(サムエル・ウルマン著、作山宗久訳、角川文庫)、『50歳、おしゃれ元年。』(地曳いく子著、集英社)

でも姿勢が悪ければ年をとって見えますし、若々しい人は皆さん、姿勢がいいです。

肌については、年齢を重ねると「色」「形」「質感」が変わってくるんですね。そこを意識してメイクするのいいと思います。私が考えるメイクの基本は、顔の中にある白、黒、赤を意識することです。「白」は明るい肌色、「黒」は眉毛やまつ毛といった目の周り、「赤」は頬や唇の血色で、この3色にメリハリをつけて顔の中でくっきりさせると、生き生きした印象に見えます。

——男性の場合は？

肌をきれいにするだけで、清潔感がぐっと上がります。まずは洗顔フォームを使って丁寧に顔を洗うことです。その後、化粧水などで潤いを与えれば全然違ってくる。その上で、眉の形を整えたりすれば、仕事ができる人という印象になりますよ。

年齢を重ねると、清潔にしている、清潔感の「感」が見えなくなりがちなんです。「感」というのは見た目の雰囲気、その「感」を見せるのが大人のナチュラルメイクなのだと思えます。

——ところで、山本さんはひとり暮らしをされていますが、寂しさや不安を感じることはないのですか。

「寂しいな」とか「これからどうなるのかな」と思う時は、もちろんあります。でも、「まあ、いいかな」と思っちゃうんですよ。考えたって、しょうがないから。

すごく寂しい時は趣味に没頭したり、友だちのところに行きます。それもできないほどつらい時は、お風呂に入って自分を磨いてあげます。髪や体を丁寧に洗ったり、念入りにスキンケアして自分をいたわっているうちに回復できていることが多いです。

——趣味は何かお持ちですか？

そうですね。ひとり暮らしの場合、自分で行動を起こさなければ、新しい人や新しいことに出会う機会がありませんから、自分が興味を持ったことは、とりあえずやるようにしています。やってみて、自分に合わないと思ったらやめればいいだけです。

——好きなことや興味を持てることがわからない人は、どうしたらいいでしょうか？

そういう人は、子どもの頃に好きだったことを思い出してやってみるといいと思います。過去に夢中になったことであれば、その芽が自分の中に残っているでしょうから。もう一つのおススメは、付箋に書き出していく方法です。私は悩んだ時やどうしたらいいかわからなくなった時によくやるので

すが、頭に浮かんだ言葉を付箋一枚につき1つずつ書き出して、スケッチブックに貼っていきます。それがある程度まとまったら、似た言葉を集めてグルーピングしていく。そうすると、自分の気持ちをはっきり見えて、次に何をすればいいかがわかります。

——それでは最後に、今後やりたいことを教えてください。

きれいになりたいけれど、どうすればいいかわからないし、忙しくて時間がないという人は多いと思います。そういう人たちに向けて、自分らしくきれいになる方法や美容の楽しさを伝えていけたらと思っています。美容が、毎日を生き生きさせるモチベーションになればいいな。

私は50歳以降、「いつ死んでも悔いが残らないように」という想いで生きてきました。悔いを残さないため、仕事もプライベートも「やりたいことは、今やる」という姿勢で臨んできました。そうすることで、心の不安もやわらぎました。「明日、自分の身に何かがあつて心配なのは、飼っている猫のことくらいかな」と思っていました。

ですが、占い師に「86歳で人生のピークが始まります」と言われて、そのピークを見てみたいなど。26年後も健康でいられるよう意識しながら、自分らしい毎日を送っていったらと思っています。

——まだまだこれからですね。本日はお話しいただき、ありがとうございました。

(インタビュー／ライター 更田 沙良)

## 年齢を重ねると、清潔感の「感」が見えなくなりがちなんです